

聖恋学院  
学園祭

Vol.3



原作:フルーツ牛乳<sup>2</sup> リットル  
イラスト:ゆーちん



## プロローグ

「いよいよ、学校生活における一大イベント学園祭を前日に控え、聖恋学院は朝から慌ただしく動いていた。」

学年担当委員長であるふみかも、この日は水泳部の朝練を休み、朝から学園祭の準備に向けた報告書のまとめをしていた。早朝にも関わらず、ふみかは鼻歌交じりにご機嫌だった。そんなふみかに、眠気交じりの他の委員が声をかけた。

「空木さん、おはよう。今日はいつもの以上にご機嫌ね」

「おはようございます、先輩！ だって明日の学園祭にむけて、どのクラスも準備も順調に進んでるんですよ。絶対どのクラスも成功しますって！」

「そりゃ結構なことね。私は各部活担当だけど、部活の準備もいい感じよ」

「ほんとですか？」

「ええ！ 特に軽音部。明日発表するオリジナル曲、一年の南野君って子が作ったんだって。めちやくちやいい曲だって、軽音部バンドが張り切ってたわ」

先輩委員のその言葉に、ふみかは思わず顔をニヤつかせた。

「それから美術部も。一年の江藤君が描いた絵がかなり評判良いらしいのよ。人物画みたいなんだけど、顧問の先生もコンクールに出せるって太鼓判だったわ」

ふみかはずますニヤニヤした顔を浮かべた。そんなふみかを、先輩は不思議そうに見つめた。

「なに？ 空木さん、そんなにニヤニヤしちゃって」

「えっ!? い、いやなんでもないです!! 部活で一年のみんなが頑張ってるんだなって思ったら、私も嬉しくなっちゃって!」

ふみかが慌ててそう答えると、先輩委員も微笑んだ。

「そうね。今年は一年生が頑張ってくれてるわ。委員のあなたもね」

「えっ? そんなことないですよ」

「そういえば…今日はあなたの相棒はまだ来てないのかしら? ここ最近やる気になってたのに」

「あ……そういえば……」

先輩の言葉に、今日は勇樹の姿が見当たらないのに気がついた。

「昨日の帰り際、学園祭にむけてやる気満々みたいなこと言ってたのに」

「ひよっとして、前日になってまたサボり癖が発動しちゃったんじゃない?」

「もう! 風間君ったら!」



ふみかは先輩委員の前ではそう思いながら顔を膨らませたが、内心は勇樹が来ないことが少し心配だった。

「まあ、そのうち来るでしょ。空木さんには、先にこれを渡しておくわ」

先輩はそう言うと、小さな茶封筒を彼女に手渡した。

「なんですか、これ？」

「学園祭の一般来場者用のチケットよ。2枚入ってるわ」

「ありがとうございます」

先輩が手渡したのは、一般の人が学園祭に入る際に必要なチケットだった。昨今はこの学校も入場が厳しく、このチケットが無いと学園祭と言えど校内に入ることができない。聖恋学院では一人の生徒に2枚のチケットが渡される。大抵は身内に渡されるのだが、ふみかの両親は今日から仕事の都合で泊まりがけで出かけており、学園祭が開催される明日の土曜日も来られない為、チケットを誰に渡そうか迷っていた。

そして朝の予鈴が鳴り、委員達はそれぞれのクラスへと戻って行った。

「お疲れさま。また放課後ね」

「お疲れさまでした」

結局、朝の委員会に勇樹が姿を見せることはなかった。

「風間君……どうしちゃったのかしら」

ふみかは心に変な胸騒ぎを抱えたまま、学園祭前日の一日を迎えることとなった。